１　作　　物

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） 〇麦の栽培ほ場の準備 〇麦のは種と施肥 〇大豆の収穫 11 月は麦のは種、大豆の収穫作業の時期である。１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多く、日照時間は平年より少ない見込みである（10 月 22 日高松気象台発表)。ほ場作業は計画的に行う。
（１）麦の栽培ほ場の準備	ア　土づくり 麦の土壌適正ｐＨは 6.2～6.9 である。土壌ｐＨの低い酸性土壌では生育不良をきたすため、石灰質資材を連年施用する（苦土石灰の場合：150 kg/10 a 程度）。 イ　湿害対策 は種期の多雨は湿害を引き起こし、出芽不良や減収を招くため、湿害対策は万全に行う。前作が終わったら、額縁明きょを早めに施工し、弾丸暗きょや心土破砕を行い、は種までにほ場の乾燥に努める（写真１）。  写真１　額縁明きょの施工
（２）麦のは種と施肥	ア　種子の準備 麦は自然交雑が起こりやすく、自家採種を続けると品種特性の劣化、混種や変異が起こるため、２～３年に１回は種子更新を行う。 また、種子伝染性病害（裸黒穂病、斑葉病など）を防除するため、種子消毒を必ず行う。消毒作業については「今月の天候と農作業（10 月)」を参照する。 イ　は種適期 ハルヒメボシのは種適期は、11 月 15～25 日である。近年、は種前にまとまった降雨があり、は種が遅れることがあるが、12 月以後の晩まきは出芽数と茎数が不足し、穂数の減少や遅れ穂の増加により減収や品質低下が起こりやすい。 そのため、は種が適期から遅れる場合は、後述のウのは種量に則りは種量を増量する。

項　　目	作　　業　　内　　容
	小麦のは種適期は、収穫期の雨による大幅な品質低下を防ぐため、はだか麦よりやや早まきが望ましく、チクゴイズミでは11 月 10 日～20 日である。しかし、早まきと暖冬が重なると早期出穂し、霜害を受け不稔になる恐れがあるので極端な早まきは避ける。 ウ　は種量 ドリルは種(条間 20cm)では１㎡あたりの出芽数の目安は、150 本程度である。10ａあたりは種量の目安は、８kg である。ただし、は種期が早い場合は６kg／10ａとし、は種期が遅いほど出芽率が低下するため、11 月 25 日以降の晩播きの場合は、５日遅れる毎には種量を１割増量する。 エ　は種深度 は種深度が深いと出芽率が低下し、その後の生育が極端に悪くなる。また土壌が過湿の状態では種すると機械が沈み込み、は種深度が深くなりやすいので、事前にほ場の乾燥に努めるとともには種前には入念に機械の深度調整を行う。 ドリルまき栽培では耕起深５～10 ㎝、は種深１～２㎝程度を目安とする。 オ　は種時の排水対策 は種後、深さ 15 ㎝の排水溝を２～３ｍ間隔で設置し、停滞水が確実にほ場外へ排出されるよう排水溝と導水路を接続しておく（写真２）。  写真２　排水溝と導水路の接続 溝の深さが 15～20 ㎝の畝立て同時は種とすることで、苗立ちが良好となり、は種時の湿害を軽減できる（写真３）。   写真３　畝立て同時播種 (左：畝立て版を両側に設置、右：畝立て版を片側に設置)

<table>
<tr><th>項　　目</th><th>作　　業　　内　　容</th></tr>
<tr><td></td><td>カ　施肥量
基肥は、ドリルまき栽培では10ａあたり窒素・リン酸・カリを５～７kg・６～８kg・８～10 kgとする。過剰な施肥は過繁茂を助長し、倒伏や品質低下の要因となるので避ける。また、はだか麦の遅まきでは肥効調節型肥料を用いた全量基肥施肥は避ける。なお、はだか麦で黄枯れ症状や枯熟れ症状が発生しやすいほ場では、追肥重点型施肥にすると減収を回避できる場合がある（追肥重点型施肥：基肥量を減らして過繁茂を抑制し、葉色に応じて中間追肥を分施する施肥方法（表１を参照））。
表１　はだか麦の追肥重点型施肥の施肥体系（窒素成分kg/10a）
<table><tr><td rowspan="2">施肥法</td><td rowspan="2">基肥</td><td colspan="2">中間追肥</td><td>穂肥</td><td>計</td></tr><tr><td>12／下</td><td>１／下</td><td>２／下</td><td></td></tr><tr><td>慣行</td><td>7</td><td>0</td><td>2</td><td>3</td><td>１２</td></tr><tr><td>追肥重点</td><td>4</td><td>3</td><td>3</td><td>3</td><td>１３</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>（３）大豆の収穫</td><td>ほ場内の雑草や青立ち株は、汚粒の発生原因となるので、収穫前に除去しておく。
収穫適期については、大豆の茎水分が高いと汚粒の発生が増えるため、茎水分が50%以下になってから収穫を始める。その目安は、茎が黒ずみ、手で容易に折れる状態である（写真４）。また、子実水分は18%程度が収穫適期である。これよりも高いと潰れ粒、低いと裂傷や割れ豆などの損傷粒が生じやすくなる。収穫時刻は、汚粒の発生を少なくするため、茎や莢が乾燥する午前10時以降を目安とする。収穫後は、子実水分15%に仕上げ乾燥し、選粒機を用いて莢雑物や被害粒を取り除く。

写真４　大豆の収穫期</td></tr>
</table>

（作成　農林水産研究所）